

# ブルーノ・タウトに関する研究の動向

北村 昌史

## はじめに

ドイツの建築家ブルーノ・タウト Bruno Taut（一八八〇—一九三八年）に関する国内外の評価の変遷を整理し、現在、この建築家について国際的に取り組むべき課題を導きだすのが本稿の課題である。建築史を専門としない筆者にとってタウトをとりあげるのには以下の三つの問題関心からである。

第一に、筆者は、一九世紀中葉以来のドイツの住宅改革運動について、ベルリンを中心として研究を進め、二〇〇七年に一書を上梓した<sup>①</sup>。一九世紀中葉に市民層に意識された労働者の住宅問題に対応すべく、住宅改革運動が展開する。世紀中葉にあつては、市民層と労働者が同じ建物・地区に住み、前者のよい影響を後者にあたえる、という発想が説得力をもっていた。一八七一年のドイツ統一前後にはこの発想の影響力は失われ、かわって都市計画

的発想にもとづいて諸社会層のすみ分けや郊外住宅地に住宅の解決を求めるような発想が主流を占めるようになる。

ただ、こうした発想は、帝政期では構想にとどまり、現実に移されていくのは、ヴァイマル共和国を待たなければならぬ<sup>②</sup>。一九二〇年代ドイツのジードルング（住宅地）の発展の背景には、「社会的住宅建設」と総称される住宅立法の整備、一九二四年の家賃税による資本の流入、公共交通機関、上下水道、ガス、電気などのライフラインの整備といった要因が想定できよう。背景については「おわりに」でまたふれる。タウトの建築活動は、第一次世界大戦前にはじまるが、その活動の全盛期は、ベルリンの郊外に一万二千住居を設計した一九二〇年代後半である。タウトの建築活動を検討することは、拙著で明らかにしたような住宅改革構想の実効性を探ることにほかならない。

第二に、近年、第一次世界大戦が、政治、経済、社会、文化に

あたえた影響が多面的に検討されている。建築に関してみるなら、一九二〇年代の欧米において、二〇世紀の三大建築家とも四大建築家とも称されるル・コルビュジエ、ミース・ファン・デル・ローエ、フランク・ロイド・ライト、そしてヴァルター・グロピウスに代表される建築上の新しい潮流が定着した。その新しい潮流は、大戦前の住宅建設がレンガ、石、木を建材として比較的装飾を施していたものであったのに対して、コンクリートを用いた、合理的・機能的な設計をその主たる特色とする。これを「モダニズム建築」という。<sup>⑤</sup>

タウトの建築もそうした潮流の中に位置づけられる。タウトは、大戦前に建築家としての活動をはじめたが、当初は田園都市の流れをくむコッテージ風の建築様式を設計していた。大戦前後には「表現主義」の潮流に乗る。「表現主義」とは、自分の心の中で表現したいことをそのまま表現する芸術様式を指す。ヴァイマル期には合理的な「モダニズム建築」に至る。タウト建築の変遷をたどることは第一次世界大戦前後のドイツ社会や文化の変化を一人の具体的な建築家から解明することを意味する。

第三に、タウトは、一九三三年にナチス政権が成立すると日本に亡命した。日本では建築の仕事はほとんどできなかったが、桂離宮や伊勢神宮の評価など独特の日本文化論を展開したことはよ

く知られている。タウト研究は、日独の比較文化史・交流史に道を開くものであるが、本稿でも論じるように、日独の軸よりも広い射程をもちえる。

さて、現時点では、タウトをめぐる二つの研究動向を描かなければならない。すなわち、ドイツ本国における研究動向と日本におけるそれである。現在、日本におけるタウト研究も本国の動向をある程度参照し、またドイツにおいてもタウトが日本において出版した著作のドイツ語版の翻刻が積極的に進められている。とはいえ、両国のタウト研究は微妙な接点をもっているにとどまり、両者は基本的に別個に展開してきたといつてさしかえない。本稿では、そのうちまずドイツにおけるタウト研究の動向を概観し、次に日本のタウト研究の動向を検討したい。二つの研究動向の整理をうけて両者を有機的に関連付けて、タウトをめぐる国際的にとりくむべき課題を導き出すことにする。

ここで、タウトが活動していたこともあるソ連・ロシアおよびトルコにおける研究について、簡単にふれておきたい。管見の限りでは、ソ連・ロシアにおいてタウトに関心を向けた研究はない。これは、一九三二年から一年間のソ連滞在中のタウトが実質的に仕事をさせてもらえなかった事情を考えると、不自然な状況とは思えない。これに対して、一九三六年から亡くなる一九三八年ま

で滞在したトルコでは、近年になってようやくタウトへ関心が向けられるようになってきている。トルコにおける研究については本稿でもふれることにする。

- ① 拙著『ドイツ住宅改革運動——一九世紀の都市化と市民社会』京都大学学術出版会、二〇〇七年。
- ② 同書第三部参照。第二帝政の都市行政や都市計画については、馬場哲『ドイツ都市計画の社会経済史』東京大学出版会、二〇一六年参照。
- ③ 当時のドイツの住宅政策や住宅建設については、後藤俊明『ドイツ住宅問題の政治社会史——ヴァイマル社会国家と中間層』未来社、一九九九年、永山のほか、『ドイツ住宅問題の社会経済史的研究——福祉国家と非営利住宅建設』日本経済評論社、二〇一二年、Brian Ladd, *The ghosts of Berlin. Confronting German history in the urban landscape*, Chicago 1997, ch. 3. *Vier Berliner Siedlungen der Weimarer Republik. Briz, Onkel Toms Hütte, Siemensstadt, Weiße Stadt. Eine Ausstellung vom 24. 10. 1984-7. 1. 1985 im Bauhaus-Archiv, Museum für Gestaltung, Berlin 1987* など参照。
- ④ 第一次世界大戦に関する研究が、開戦百周年の二〇一四年前後に盛り上がりを見せたが、そうした研究動向については、たとえば、小関隆「第一次世界大戦研究の現段階——京都大学人文科学研究所の共同研究を中心に」『西洋史学』二四五、二〇一二年および橋本伸也「現代の起点 第一次世界大戦」（全四巻）と第一次世界大戦研究の到達」『西洋史学』二五六、二〇一四年参照。
- ⑤ モダニズム建築については、ピーター・ブランデル・ジョーンズ『モダニズム建築——その多様な冒険と創造』（中村敏男訳）風土社、二〇〇六年参照。

⑥ 表現主義は美術、文学、建築など複数の領域にまたがる芸術の動きであるが、さしあたって、土肥美夫『ドイツ表現主義の芸術』岩波書店、一九九一年参照。

## 一 ブルーノ・タウトの生涯

ここでタウトの生涯<sup>①</sup>について簡単にふれておこう。タウトは、一八八〇年にケーニヒスベルクで生まれた。ギムナジウム修了後、まず故郷で建築家としての修業をし、その後シュトゥットガルトやミュンヘンでの修業を経て、一九〇八年にベルリンでタウト・ホフマン建築事務所を開業する。他の建築家との共同作業のなか外装だけを担当する仕事からキャリアを開始する。実践的な建築家としての最初の大きな仕事は、第一次世界大戦直前にベルリン南東部に建設されたファルケンベルクとマクデブルク郊外のレフォールムであろう。両方とも、一九世紀初頭のヨーロッパで流行した田園都市の様式によるものである。他に大戦前のタウトの活動として重要なものは、一九一三年の鉄のモニュメントと一九一四年のグラスハウスであろう。両者とも、博覧会のための一時的なパヴィリオンであるが、新しい建材の可能性を試したものだといえる。

第一次世界大戦中は、建築家としての仕事はなく、その間、戦

後に『アルプス建築』（一九一九年）や『都市の冠』（一九一九年）などとして結実するユートピア的構想を練る。<sup>②</sup>戦前の博覧会建築や戦中のユートピア的構想は、当時見られた芸術上の「表現主義」的な潮流が反映したものである。大戦後はマクデブルクの都市建築顧問官として、都市計画の責任者となる。この時期のタウトは、ドイツ全体の経済状況もあり、十分な成果をあげることはできなかった。

一九二四年には、住宅設計の原則として、合理的な部屋や家具の配置、およびそこで家事をおこなう女性の役割を議論の軸にした著作『新しい住宅』<sup>③</sup>を刊行する。この著作で展開された原則に基づいて自宅を建設し、それについて『二住居』<sup>④</sup>（一九二七年）にまとめる。『新しい住宅』刊行と同じ一九二四年にはマクデブルクの職を辞し、ベルリンに戻る。それ以降、一九二四年に導入された家賃税に基づく資本の流入による、公益的な住宅建設の隆盛のなか、<sup>⑤</sup>広範な社会層のための住宅建設に従事する。一九三〇年代はじめまでにかけて一万二千世帯のための住宅をベルリンで設計した。<sup>⑥</sup>この頃は主に G E H A G (Gemeinnützige Heimstätten, Spar- und Bau-Aktiengesellschaft 公益的住宅・貯蓄・建築株式会社)<sup>⑦</sup>の建てる住宅のための設計をおこなった。当時、公益的住宅建設による住宅はベルリンにおいて一三万世帯分

建設され、タウトはそのうち一割近くに関わったことになる。<sup>⑧</sup>世界文化遺産に登録された馬蹄形ジードルングなどタウトの代表的な住宅の多くはこの時期に建設されている。設計の仕事で多忙な中、一九二七年には『新住宅建設』、一九二九年には英語の『近代建築』とそのドイツ語版の『ヨーロッパとアメリカにおける新建築』を刊行している。<sup>⑨</sup>

一九二九年に大恐慌が発生すると住宅建設の依頼は減り、仕事を求めて三二年にはモスクワに活動の場を移すが、活動の機会のないまま、翌三三年二月に帰国した。その直前に成立したナチス政権から睨まれていることを知らされたタウトは、日本に亡命する。日本では、桂離宮や伊勢神宮、あるいは白川郷の民家の評価など独自の観点から日本文化を評価した仕事は注目された。日本滞在中に森嶋郎訳で和文の『ニッポン——ヨーロッパ人の眼で見た』（一九三四年）や『日本文化私観』（一九三六年）、そして離日直後に英文の *Houses and People of Japan, Tokyo 1937* が出版され、トルコに移住後も、編纂ものであるが、岩波新書から篠田英雄訳で『日本美の再発見』（一九三九年）が出版されている。彼の最後の著書『建築芸術論』も、構想や執筆は日本滞在中にはじめたものである。他方、熱海の日向邸の地下室の内装の改造以外に、建築家としての仕事はほとんどなく、もっぱら仙台や高崎

で工芸品の製作の指導をおこなう。

三年強の日本滞在の後、三六年の秋にトルコに移住し、公共建築の設計などに従事するが、三八年のクリスマス・イブの日に急死した。死去の前にはタウトの建築・都市論の集大成ともいえる『建築芸術論』の原稿は完成しており、それはまず一九三八年にトルコ語版で、戦後一九四八年に日本語版、そして一九七七年にドイツ語版が出版された。<sup>⑩</sup>

章を改めてドイツ本国におけるタウトの研究史を見ていこう。

- ① タウトの伝記研究としては Kurt Jungmanns, *Bruno Taut, 1880-1938. Architektur und sozialer Gedanke*, 3. überarbeitete und erg. Aufl., Berlin 1998; Uda Horner, *Die Architekten Bruno und Max Taut. Zwei Brüder - zwei Lebenswege*, Berlin 2012 がある。より簡便にタウトの人生を概観するには、『ブルーノ・タウト年譜 ブルーノ・タウト自身による一九三六年の履歴書より』『ブルーノ・タウト一八八〇—一九三八 Nature and fantasy』トレヴィール、一九九四年参照。
- ② Bruno Taut, *Alpine Architektur*, Hagen 1919; ders., *Die Stadtkrone*, Jena 1919; ders., *Der Webbaumeister. Architektur-Schauspiel für symphonische Musik*, Hagen 1919; ders., *Die Aufföschung der Städte oder Die Erde eine gute Wohnung oder auch. Der Weg zur alpinen Architektur*, Hagen 1920.
- ③ Ders., *Die neue Wohnung. Die Frau als Schöpferin*, Leipzig 1924.
- ④ Ders., *Ein Wohnhaus*, Stuttgart 1927.
- ⑤ 家賃税については、後藤前掲書および永山前掲書参照。

- ⑥ 前掲「ブルーノ・タウト年譜」。
- ⑦ Wolfgang Schäche (Hg.), *75 Jahre GEHAG. 1924-1999*, Berlin 1999.

- ⑧ Herbert Schwenk, *Lexikon der Berliner Stadtentwicklung*, Berlin 2002, S. 253.

- ⑨ Bruno Taut, *Bauen der neue Wohnbau*, Leipzig/Berlin 1927; ders., *Modern architecture*, London 1929; ders., *Die neue Baukunst in Europa und Amerika*, Stuttgart 1929.

- ⑩ トルコ語版 *Mimari bilgisi*, tercüme eden Adonan Kolaran, Istanbul, Güzel Sanatlar Akademisi, 1938. 日本語版『建築芸術論』（篠田英雄訳）、岩波書店、一九四八年。ドイツ語版 *Architekturlehre. Grundlagen, Theorie und Kritik. Beziehung zu den anderen Künsten und zur Gesellschaft*, Hamburg 1977. トルコ語版は、大阪市立大学准教授上野雅由樹氏の御好意で入手できた。

## 二 ドイツ本国におけるブルーノ・タウト研究の動向

### (一) 忘れられた建築家

タウトは、ベルリンで活発な活動をしていた一九三〇年代初頭まではドイツ本国でも注目を集めていたが、一九三三年に日本に亡命してからは、忘れられた建築家となる。これは、モダニズム建築を嫌うナチス政権のもとでは、タウトのような建築家の業績が極度に低く評価されたからである。<sup>①</sup> こうした風潮のもとで G E H A G も、労働組合運動の指導者の名前をとった住宅都市カー

ル・レギーンを住宅都市フランデルンと改名し、タウトのジードリングがもっていた社会的コンテクストを消し去ろうとした。<sup>②</sup>

一九三八年に亡くなり、帰国することのかなわなかったタウトは、戦後のドイツやヨーロッパ社会の状況に適合した建築物を設計しているわけではない。ナチス時代にドイツにとどまり、戦後建築家としての活動を再開したタウトの弟マックスやハンス・シヤロウン、戦後帰国したマルティン・ヴァーグナーやエルンスト・マイ、亡命先のアメリカ合衆国で戦後も国際的に評価される活動を続けたミース・ファン・デル・ローエやグロピウスのように、実際の建築活動で戦後復権した建築家たちとは状況が異なる。<sup>③</sup>

戦後ドイツで建設された集合住宅も、直線的・無機質なものが多く、建物に彩色を施したり、建物のデザインに斜めの線や曲線を積極的にとりいれたりするタウトの設計の在り方とは一線を画している。とくに第二次世界大戦直後は住宅の量的充足が急務の課題であり、タウトのような設計や施工に微妙な手間を要求するようには思われる建築の在り方は、当時、うけいられるようなものではなかったであろう。

こうして、ドイツ本国の建築界や建築史研究において一九三三年に亡命して以来タウトはほぼ忘れ去られた建築家であった。とくに日本やトルコでの活動は紹介されず、日本滞在中に発表され

た日本文化について論じた書物や『建築芸術論』のドイツ語版が出版されることもなかった。もし亡命以降のタウトのことをドイツ人が調べようとしても、日本語やトルコ語で出版された、当時の著作や論文の内容を理解できる人間は限られていた。

そうした中で例外であったのが、一九一九年から一九二〇年代初頭にかけての、芸術労働評議会に端を発するタウトの一連の活動であろう。芸術労働評議会とは、タウトが設立者の一人となつて一九一八年にベルリンで結成された組織であり、ドイツ革命後の労働者と兵士の評議会運動の盛り上がりを背景に、画家、建築家、彫刻家などの芸術家による同種の組織を作ろうとしたものである。そうした流れからタウトが中心となつて二名の建築家や芸術家の往復書簡の試みである『ガラスの鎖』<sup>⑤</sup>（一九一九〜一九二〇年）、そしてそれをさらに発展させた雑誌『曙光』<sup>⑥</sup>の刊行（一九二〇〜一九二二年）がおこなわれた。この一連のタウトの活動については一九六三年に展覧会が開催され、その活動が広く紹介されたが、これは、社会主義思想に親近性をもつ評議会に対する関心が前面に出たものといえる。

これに対して、戦後建築家としてベルリン再建の一端を担い、ベルリン美術学校 (Hochschule) 教授として後進の育成にも携わつた弟のマックス・タウトは広くドイツ社会に認知され、ほぼ

同時期の一九六四年には彼の活動全体をあつかう展覧会がベルリンで開催された<sup>⑧</sup>。この時点で兄弟の扱われ方には雲泥の差があった。

比較的早くに関心が復活した第一次世界大戦直後のタウトは、第一章でのべたように、「表現主義」と称される芸術の潮流の中で活動していた。「表現主義」の動きが建築に結実する際、メンデルゾーン設計のアインシュタイン塔（ポツダム）のように、それはそれまでの建物の概念を破ったような形態をとることが多い<sup>⑨</sup>。「表現主義」の芸術家の中でタウトに影響をあたえたのは、シエーアバルトという小説家といわれている<sup>⑩</sup>。タウトは、第一次世界大戦前の博覧会建築から大戦中のユートピア的著作を経て戦後に至るまで表現主義の色彩の濃い表現を志向する。『ガラスの鎖』や『曙光』の活動も、表現主義的な傾向をもつ芸術家との活動である。一九六〇年代までの研究においてこの時期の彼に関心が集中したことから、タウトは「表現主義」の建築家と評価される傾向があったことは否定できない<sup>⑪</sup>。たしかに、色彩へのこだわりや建物のデザインに微妙なアクセントをつけるのは、彼に一貫してみられる表現主義的な特徴といえる。とはいえ、タウトは、様々な芸術・建築の潮流をたくみに取り入れながら、柔軟にその思考を変化させているので、「表現主義」とのみ位置づけるのなら、

それは一面的評価であるといえる。

## （二）ブルーノ・タウト研究の興隆

一九七〇年代からタウトに対して新たに関心が向けられるようになる。その背景については断定的なことはいえないが、建築の世界に関していえば、このころから戦後の建築の主流であった「モダニズム建築」からより自由な造形を目指す方向へ建築思想の流れが転換したことがあげられよう<sup>⑫</sup>。色彩へのこだわりなど「モダニズム建築」の中でも異彩を放つタウトの建築が、新たな建築の方向性を考える手掛かりとなるとみられたのであろう。この時期、タウトへの関心は次の四つの点にみられる。

まず、一九七〇年に建築史家クルト・ユンクハンスによる詳細なタウトの伝記が公刊された<sup>⑬</sup>。東ドイツの研究者であった彼のタウト伝にはイデオロギー色はなく、新たな史料を発掘したうえで書かれたものである。初版刊行後、日本におけるタウトの情報が追加されるなど二度にわたって改訂され、現在でも彼に関する伝記的情報の決定版といえる。

次に、タウト最後の著作である『建築芸術論』のドイツ語版が、一九七七年に出版された<sup>⑭</sup>。ドイツにおける建築活動や思索を土台に、日本やトルコにおける見聞もふまえ、タウトの建築や都市に

関する思索を集成した本書が、ドイツ人にもアクセス可能となった。

第三に、馬蹄形ジードルングと森のジードルングにおいてほぼ同時に建築当初の状態に復元する動きが見られた。それまでは、建物の改造や塗装の劣化が見られ、多くの住居でタウトの設計からかなり変化していたが、建築史家の調査などをふまえ、地域の行政当局と住民の交渉の結果、建物を、タウトが設計した状態に戻すことが決まった。付け足されていた構造物の撤去やタウトの指示通りの彩色がおこなわれ、その後もその際に決められた原則により建物は管理されていく。ここでおこなわれた建物の復元の手法は、とくに今世紀になってから進むタウト建築復元のお手本となっていく。<sup>16</sup>この二つのジードルングに、ジーマンスシュタットとヴァイスシュタットを加えてヴァイマル期のベルリンを代表する四つのジードルングに関する展覧会が一九八四年に開催されているが、これは二つのジードルングの復元の試みをその背景の一つとする。

最後に、一九八〇年に東ベルリンの芸術アカデミーではじめてタウトに関する展覧会が開催されている。この展覧会により、タウトという忘れられた建築家の活動の全体像によく多くの人がふれられるようになったのである。この展覧会はほぼそのまま、

日本でも武蔵野美術大学において開催されている。<sup>19</sup>

とはいえ、タウトに関する研究が本格的に進展するようになるのは一九九〇年代になってからのことである。環境問題への関心の高まり<sup>20</sup>とともに、自然との共生をはかったタウトの建築を新たな観点から評価しようとした点も指摘できよう。何よりも重要なのは、一九八九年のベルリンの壁の崩壊、そして翌年の東西ドイツ・ベルリンの統一であろう。ベルリンにおけるタウトの建築は東西にまたがって散在しており、また彼の建築物がまとまって存在しているマクデブルクも東ドイツに位置していた。往来が自由になったことにより、東西に散在されていた資料がまとまって利用可能になり、さらに实地調査が容易になったのである。

二〇世紀の四大建築家といわれているライト、ル・コルビュジエ、ミース・ファン・デル・ローエ、そしてグロピウスといった傑出した建築家についての研究は、従来から積み重ねられてきた<sup>21</sup>が、それ以外の建築家への関心が一九九〇年ころから高まっている。<sup>22</sup>タウト研究の増大もそうした流れの一環であることも指摘しておこう。従来は二〇世紀のモダニズム建築を作り出したとされる建築家へ関心がむけられた。それに対して、二〇世紀の建築の主流の中に位置づけられてこなかった建築家たちにも光をあて、二〇世紀の建築の本質をとらえなおそうとしたのである。タウト



と同時代の建築家でも、ベルリンで活躍したフーゴ・ヘリンクや  
オットー・ルドルフ・ザルヴィスベルク<sup>24</sup>、ツエレでタウト同様  
建物に色彩を施したヘスラー<sup>25</sup>といった建築家への再評価がおこな  
われたのも一九九〇年代以降のことである。

さて、一九九〇年代以降のタウト研究の一つの特徴は、それ以  
前の研究が彼の代表的な業績を中心に検討してきたのに対して、  
従来本格的にとりあげられてこなかったような建築や著作も研究  
対象になったことであろう。

タウトの独自性はそれほど感じられない初期の作品や、第一次  
世界大戦後に建てられた、マルティン・ヴァーグナーや造園家レ  
ベレヒト・ミッゲに協力したリンデンホーフ<sup>27</sup>といった、彼の建築  
の代表例とはいいがたい建物についても、一次資料の発掘に基づ  
き安定した情報を提供する研究が生まれている。

ドイツ全体の経済状況の悪化や地元の住民の抵抗で十分な成果  
があげられなかったマクデブルクの建築顧問官としての活動につ  
いても研究が世に問われている<sup>28</sup>。この時期のタウトの活動に関す  
る資料を体系的かつ網羅的に収録した資料集も公刊される<sup>29</sup>。第一  
次世界大戦前から一九二〇年代にかけてマクデブルクで断続的に  
建設された田園都市「レフォルム」に関する実証的な研究が出版  
された。レフォルム全体が、現在、建築当初の姿に戻されている<sup>30</sup>。

ベルリンにおけるタウト建築の集大成ともいえるべき研究が、ブ  
レンネらによるガイドブックである<sup>31</sup>。これは、ベルリンに存在し  
たタウト建築を網羅し、それぞれについて建築当時の基礎データ  
や現状について簡潔にまとめたものである。こうした作業が可能  
になる背景には、一九九〇年代以降進んだ、ベルリンにおけるタ  
ウト建築の修復や建築時点への復帰の動きがある。現在、ベルリ  
ンに残るタウト建築は、その多くが構造も彩色も設計当初の姿に  
なっている。

『アルプス建築』や『新しい住居』をはじめとして、主要な著  
作の復刻もおこなわれた<sup>32</sup>。この点でとくに注目に値するのが、日  
本語だけで出版されていたタウトの日本文化論の代表的なもの  
ドイツ語版の刊行が、ここ数年、シュパイデル教授の手により進  
められていることであろう<sup>33</sup>。一九三二年から一年だけ滞在したモ  
スクワにおけるタウトの活動についての資料集も公刊されている<sup>34</sup>。  
トルコにおけるタウトの活動についても一定の関心が払われるよ  
うになっている<sup>35</sup>。

従来から検討が加えられてきた「表現主義」としてまとめられ  
ている第一次世界大戦前後の活動、さらにはその時期の彼に影響  
をあたえた小説家パウル・シェーアバルトとの関係も再検討され  
ている<sup>36</sup>。伝記研究では、近年ヘルナーによるタウト兄弟を対比し

たものが出版されており、より簡便に彼らの人生を辿ることができるとなった。<sup>⑦</sup>

こうした動向の中、二〇〇一年に出版された論文集『ブルーノ・タウト 一八八〇—一九三八年 伝統とアヴァンギャルドの間の建築』は、タウト研究にかかわってきた多くの研究者が参加し、初期から最後までタウトの活動全体を網羅したものであり、今世紀初頭の段階のタウト研究の到達点を示したものである。現時点でも研究の土台とすべき研究成果であり、掲載されている論文のみならず、収録されているタウトによる建築物や著作のリストも研究の土台としての価値を高めている。<sup>⑧</sup>

以上、ドイツ本国では、ここ二〇年ほどでタウトに関して様々な側面が発掘され、あるいはすでに研究された業績についても洗い直しが進められた。現在のドイツにおけるタウト研究の到達点を整理しておく。

まず、ドイツにおける活動について現存する資料の発掘が進み、それらに体系的に研究の手が加えられ、以前よりも着実な情報に基づいて議論することが可能となった。ドイツにおけるタウトに関して資料の探求の余地が残されているのが、故郷であるケーニヒスベルク（現在ロシア領カリニングラード）時代に関するものである。

次に、タウトの背景にある建築上の潮流について、従来「表現主義」といった評価が前面に出ていたが、彼の活動時期全体についての情報が充実してくるにつれ、そうした単純なレッテル貼りではとらえきれない彼の建築や思想の多様性や柔軟性が印象に残るようになっていく。たとえば、一九二〇年代後半以降のモダニズム建築を前面に押し出した時期にも、彼の建築の中に表現主義や田園都市的な要素がしばしば顔を出している。

最後に、近年のタウト再評価の動きが、彼の設計し、現存する多くの建物の修復を伴ったことにより、建物に込められた彼の思想・理念・発想への接近を容易にしたといえる。かつての建物の状況が再現されていることは、実際に建物の修復に従事した者にとつてのみならず、様々な関心からタウト建築を訪問する者にとつても、タウトの建築を具体的に把握できるようにしている。その点、ベルリンとマクデブルクのタウト住宅については、修復の作業をふまえた書物が出版されている意義は大きい。

とはいえ、建築学・建築史・美術史の観点からなされている近年のタウト研究は、そうした視角ゆえの限界をはらんでおり、そうした点の克服が今後のタウト研究の課題といえる。

まず、近年の研究はタウトの設計した建物や著作そのものに関心を集中させており、彼の営みを社会史的コンテクストの中に置

くような視点は希薄である。一九九〇年代までの都市史研究においては、市民や労働者といった社会階層、あるいは都市社会内のヘゲモニーのあり方に関心が向けられていた。それに対して、近年の都市史研究では、建築史と社会史を接合するような視点が前面に出てきている。<sup>39</sup>ところが、タウト建築の研究についていえば、たとえば、従来、ジードルンク住民の生活史や都市空間の中のジードルンクの位置づけなどは問題となっていない。<sup>40</sup>個々のジードルンクをとりあげた研究については、郷土史的なものか、地域住民により私家版として刊行されるような水準にとどまる。<sup>41</sup>貴重な情報は明らかにされているが、当時のベルリンやドイツ社会史の広いコンテクストにつながるものとはいえない。

とはいえ、近年、馬蹄形ジードルンクについてのホルシユテンの研究のように、住民の開催した祭りを手掛かりにジードルンクの置かれた社会的コンテクストを確かめる研究も出はじめていることは指摘しておこう。邦語だが、同様の視角の研究をすでに北村が森のジードルンクについておこなっている。<sup>42</sup>これにとどまらず、従来研究の対象となつて来たとはいえない建築業者について、タウトの建築のみならず、パウハウスの建築やベルリン南部郊外の開発にもかかわつた建築業者ゾンマーフェルトに関するモノグラフが刊行された。<sup>43</sup>タウトの活動やジードルンク建設の社

会史的背景を探る手掛かりが提供されつつある。

次に、近年の研究もタウトの建築や思想のなかの一側面を対象を絞り、それに関する資料を極めたタイプの研究が多く、断片的な情報が集積されつつあるという印象はぬぐえない。現在、着実な情報を総合した新たなタウト像が、求められている。そうした成果に基づいてタウトの活動を建築や芸術をめぐるより大きな流れの中に位置づける作業が必要である。

とくにタウトの抱いていた建築思想・都市構想などの分析は、確かに個々の著作についての検討はなされているものの、構想の時期を追った展開についての分析は十分おこなわれてきたとはいえない。タウトの特徴の一つとして設計だけではなく、多くの著作や論文で自分の考えをのべたことがあげられる。そうした著作や論文を通じて、タウトが実際の建築活動や社会状況の中でどのように思念を展開してきたかを分析することが可能なのである。タウトは、第一次世界大戦前から一九三〇年代にかけての建築の革新の時期の建築家の思想的特性をつかむのに有効なぞき穴といえるのだが、そうした点が十分に認識されてきたとはいえない。こうした点が第三の問題点につながる。ソ連、日本、そしてトルコにおけるタウトの活動は紹介されているが、本国における研究はあくまでもドイツにおけるタウトの活動に集中している。そ

の際、ドイツ本国に残った建築家と異なり、ナチス政権が誕生した直後に亡命したことによりナチとの何らかの関係という「汚点」を恐れることなく、「古き良きドイツ」を求めてタウト研究がすすめられたという側面が指摘できよう。<sup>④</sup> ドイツでの経験をふまえて、異文化に直面して独自の活動をおこなった側面は、ドイツにおける研究ではいまだ背景に退いたままである。こうした異文化をまたにかけた人物としてタウトを理解するためには、建築・都市論の集大成といえる『建築芸術論』に至る道のりとしてタウトの建築論の展開を検討することが有効な手がかりをあえてくれる。

この著作には、ドイツにおける建築活動や思索とともに、日本におけるタウトの見聞が強く反映している。『建築芸術論』を集大成とするタウトの思想の展開を的確に理解するには、日本におけるタウトの活動や著作を検討する必要があることはここで強調したい。最近でこそ状況が変わってきているが、前世紀末までは日本におけるタウトは日本だけで研究されてきた。章を改めて、タウトが日本においてどのように研究されてきたのかを整理してみたい。

① たとえば、ナチ政権が誕生すると、モダニズム建築の特徴とされる陸屋根(平屋根)への反対キャンペーンが展開していき、H.

Muhlheid, Das deutsche Dach. in: *Soziale Bauwirtschaft*, 14, 1934: Versagen der Flachdächer in Berlin. in: *Deutsche Bauzeitung*, 38-4, 1934. ナチ政権下のモダニズム建築をめぐる力学については拙稿「ブルーノ・タウトの集合住宅」尾関幸編『ベルリン——砂上のメトロポール(西洋近代の都市と芸術 五)』竹林舎、二〇一五年、四一九—四二〇頁参照。

② *Die Gross-Siedlung*, 7-7, 1936, S. 5.

③ 個々のモダニズム建築家の経歴については、プランテール・ジョーンズ前掲書参照。

④ 第二次世界大戦後の西ドイツの住宅政策・建設については、ティルマン・ハランダー「二〇世紀後半ドイツ連邦共和国(西ドイツ)における住宅と都市の発展」(北村昌史・長尾唯・前田充洋共訳)、中野隆生編『二〇世紀の都市と住宅——ヨーロッパと日本』山川出版社、二〇一五年参照。

⑤ Ian Boyd Whyte und Romana Schneider (Hg.), *Die gläserne Kette. Eine expressionistische Korrespondenz über die Architektur der Zukunft*), Briefe von Bruno Taut und Hermann Finsterlin, Hans und Wastil Luchardt, Wenzel August Habilit und Hans Scharoun, Otto Grono, Hans Hansen, Paul Goesch und Alfred Brusi, Stuttgart 1996.

⑥ Bruno Taut, *Frühlicht Eine Folge für die Verwirklichung des neuen Bangedankens*, 4 Hefte in Faksimile-Ausgabe (Herbst 1921, Winter 1921/22, Frühling 1922, Sommer 1922), Berlin 2000.

⑦ *Die gläserne Kette. Visionäre Architekten aus dem Kreis um Bruno Taut 1919-1920* (Ausstellungskatalog), Berlin 1963.

⑧ *Max Taut. Ausstellung in der Akademie der Künste vom 19. Juli bis zum 9. August 1964*, Berlin 1964.

- ⑨ 表現主義の建築については、山口廣『ドイツ表現派の建築——近代建築の異端と正統』井上書院（新装第二版）一九八八年参照。タウトの表現主義建築の構想に形があたえられたものとして、ブレーメン郊外ヴォルプスヴェーデのケーゼグロッケがある。
- ⑩ Leo Ikeala (Hg.), *Paul Scheerbart und Bruno Taut. Zur Geschichte einer Bekanntschaft. Scheerbarts Briefe der Jahre 1913-1914 an Gotfried Heinersdorff, Bruno Taut und Herwart, Walden, Paderborn* 1996.
- ⑪ Whyte und Schneider (Hg.), *a. a. O.: Taut, Frühlicht Ikealar* (Hg.), *a. a. O.*, 山口前掲書をも表現主義時代のタウトに焦点をあててつづる。
- ⑫ 松隈洋『近代建築を記憶する』建築資料研究社、二〇〇五年、一〇—一頁。
- ⑬ Junghans, *a. a. O.*
- ⑭ Bruno Taut, *Architekturlehre*.
- ⑮ 馬蹄形ジューケルントの復元プロジェクト *Hufeisenstadtung Britz 1926-1980. Ein alternative Siedlungsau der 20er Jahre als Studienobjekt*, Berlin 1980。森のジューケルントの復元プロジェクト Helge Pitz-Winfried Brenne, *Beizte Zehlendorf. Siedlung Onkel Tom, Einfamilienhäuser 1929*, *Architekt Bruno Taut*, Berlin 1980 参照。
- ⑯ タウト建築の修復状況については、Deutscher Werkbund Berlin e. V. (Hg.), *Bruno Taut. Meister des farbigen Bauens in Berlin*, Berlin 2005 参照。
- ⑰ *Vier Berliner Siedlungen der Weimarer Republik*.
- ⑱ *Bruno Taut : 1880-1938. Ausstellung der Akademie der Künste vom 29. Juni - 3. August 1980*, 1. Auflage, Berlin 1980.
- ⑲ 『建築家ブルーノ・タウトのすべて——日本美の再発見』Bruno Taut 1880-1938』武蔵野美術大学、一九八四年。
- ⑳ 環境史をめぐる諸問題については、フランク・ユークェッタ『ドイツ環境史——エコロジー時代への途上へ』（服部伸・藤原辰史・佐藤温子・岡内一樹訳）、昭和堂、二〇一四年参照。
- ㉑ 四大建築家の邦語の伝記を各一冊あげると、大久保美春『フランク・ロイド・ライト——建築は自然への捧げ物』ミネルヴァ書房、二〇〇八年、フランク・ミューツ『評伝ニース・ファン・デル・ローエ』（澤村明訳）、鹿島出版会、二〇〇六年、安藤忠雄『ル・コルビエジエの勇氣ある住宅』新潮社、二〇〇四年、蔵田周忠『プロピウス』彰国社、一九五三年があり、彼らに関する研究は洋の東西を問わず汗牛充棟の観がある。
- ㉒ 拙稿「近代ヨーロッパにおける都市と住宅をめぐって」『西洋史学』二五三、二〇一四年、五六—五七頁参照。
- ㉓ Matthias Schirren, *Hugo Haring. Architekt des neuen Bauens 1882-1958*, Ostfildern-Ruit 2001; Peter Blundell Jones, *Hugo Haring. The organic versus the geometric*, Stuttgart/London 1999.
- ㉔ O. R. Salvisberg *die andere Moderne*, Werkatalog und Biographie von Claude Lichtenstein, Zürich 1995.
- ㉕ Dietrich Klatt, Simone Oelker, *Architekturen zu Bauten von Otto Haasler in Celle*, Celle 2000.
- ㉖ Brigitte Renate Vera Lamberts, *Das Führerwerk von Bruno Taut (1900-1914) unter besonderer Berücksichtigung seiner Berliner Arbeiten. Architektur zwischen Tradition und Moderne*, Inauguraldissertation zur Erlangung der Doktorwürde, Bonn 1994.
- ㉗ Claudia Zimmermann, *Die Siedlung Lindenhof als Impuls für sozialen Wohnungsbau in Berlin*, Dissertation, Berlin 1993.
- ㉘ Hanns H. F. Schmidt, *Bruno Taut in Magdeburg* Carl Kreyl





で日本インターナショナル建築会が結成される。一九三〇年の段階で一八七名の会員数を誇ったこの団体には、ドイツ系のモダニズム建築家を中心に外国人のメンバーも名前を連ねる。その中には、ヴァルター・グロピウスなどとならびブルーノ・タウトの名も見られるのである。こうした縁からタウトが、最初の亡命先として日本に到来することになる。<sup>②</sup>

亡命前に書かれたタウトに関する研究の中で特筆に値するのは、一九三二年に出版された、建築家・建築史家蔵田周忠による『歐州市の近代相<sup>③</sup>』であろう。本書は、一九三〇年前後の一年数ヶ月間のヨーロッパ滞在の見聞をふまえ、当時のヨーロッパで見られた新しい建築の動向全般を概観したものである。タウトのジードルングに関しても、彼の代表的なジードルングの一つである「森のジードルング」に実際に居住し、その経験と同時代の新しい傾向についての知見をふまえて、タウトの代表的仕事についてバランスのとれた概観をおこなっている。蔵田が一九四二年に出版した伝記『ブルーノ・タウト』<sup>④</sup>は、小著ながら、タウトの本領が発揮されていたドイツでの活動を簡潔、かつ的確に整理した上で彼の生涯が語られたものである。現在でも日本語で書かれたタウト伝としてはもっともバランスのとれたものとなっている。

七〇年前に書かれた書籍が現在でも生命力をもちえているのは、

その後の日本におけるタウト研究に強力なバイアスがかかっているためである。いうまでもなく、一九三三年のタウトの日本への亡命と日本文化をめぐる著作活動である。日本滞在中建築家としての仕事をほとんどできなかったタウトは、第一章でものべたように、日本文化について多くの文章を残している。

そうした文章の中で、桂離宮や伊勢神宮を日本文化の代表として称揚し、白川郷や佐渡や秋田の農家の構造をその機能性ゆえに高く評価し、他方、従来評価の高かった日光東照宮を「いかもの」として強く批判している。「いかもの」とは、タウトが批判的に捉える建物にはったレットテルである。短期間の滞在ながら、自分の観察を的確に表現していくタウトの日本文化論は、当時から大きな反響をえる。『日本美の再発見』は、一九六二年までに一九刷りにおよび、その時に改訳がなされたのち現在まで八刷りと、着実に読み継がれてきた。

小説家坂口安吾が一九四二年に『現代文学』に「日本文化私観」<sup>⑤</sup>を発表して、タウトの議論に「かみついて」いることから見ても、タウトの日本文化論が当時大きな反響をえていた様子がかがえる。坂口は、タウトが「日本中で最悪の都会」（篠田訳・坂口は「日本における最も俗悪な都市」<sup>⑥</sup>）とする新潟出身であり、タウト「の蔑み嫌うところの上野から銀座への街、ネオンサイン



を僕は愛す」。他方桂離宮などタウトが称賛するものなど見たことがないという。それでも日本文化は了解しているとする坂口にとってはタウトが見たものとは違った「日本文化」の存在を強調し、タウト批判の意味を込めてタウトの二冊目の日本文化論と同じ題名をその文章につけたのである。

この文章はタウトの没後に公表されたものであり、この文章に対するタウトの応答はもちろんない。またタウトは日本語を解さなかつたので、もし日本滞在中に公表されていても、どこまで生産的な議論が展開したかは定かではない。とはいえ、二つの「日本文化私観」は、日独比較文化論・比較文学論の格好の素材として日本ではとりあげられてきた。日本におけるタウトの著作が紹介されてこなかつたドイツではこうした議論はおこなわれていない。

亡命以後、ドイツではタウトは忘れられたのに対して、日本では、日本文化を独特の視点で捉え直した異邦人としての側面が強調され、ドイツにおける建築家としての活動は、どちらかといえれば背景に退いてしまった観がある。

日本におけるこうしたタウト評価の傾向を助長したのが、戦中・戦後に刊行された彼の「全集」や「選集」であろう。「全集」は育成社弘道閣から戦時中の一九四二年から四三年にかけて全六

巻の予定で発行されたが、第四巻は未刊行に終わる。大戦が終わると「選集」が二種類刊行される。一九四六年から四八年にかけて育成社から、五〇年から五一年にかけてが春秋社から出版された。これらは、「全集」「選集」といつつ、ほぼ日本滞在中に執筆されたタウトの著作・文章が中心であり、例外は全集の第六巻に収録された『アルプス建築』、第五巻の『都市の冠』、『新建築』（ヨーロッパとアメリカにおける新建築）、そして『燭光』から選んだいくつかの文章のみである。ドイツにおける建築家としての活動中彼は連綿と文章を書き連ねてきたが、そうした文章の大半は、収録されていない。戦後の選集では、ドイツ時代の文章はほぼ無視されている。

こうした部分的な「全集」や「選集」が、重ねて刊行された背景は、タウトの日本文化論にそれだけ大きな反響があったということなのであろう。ドイツにおけるタウトの活動はもちろん知られていたが、タウトに関するイメージは、日本滞在中に書かれ翻訳された一連の著作によってその後長い間規定されていたといえる。ただ、篠田秀雄を中心に訳されたタウトの翻訳のはらむ問題については後ほどふれるであろう。

第二次世界大戦後、タウトと関わりのあつた人たちの回想や追憶は公表されることはあつても、従来のタウトイメージを再確認

するにとどまる<sup>⑧</sup>。既翻訳のタウトの著作を利用しながら「日本文化の再発見者」というイメージを拡散させるようなエッセイは書かれることはあっても、タウトの著作を新たな視点で読み込んだ研究もない。第二次世界大戦後も *Houses and People of Japan* は、『日本の家屋と生活』と題して四九年に雄鶏社から吉田鉄郎・篠田英雄共訳で、五〇年には春秋社から篠田単独訳で出版された。その後も、篠田訳で、岩波書店から『建築芸術論』の日本語版（一九四八年）や日本滞在中のタウトの日記の翻訳が出版されている<sup>⑩</sup>。時期は後になるが、一九八一年にはタウトの二回目の桂離宮訪問の際（一九三四年五月七日）のスケッチも篠田の訳で公刊された<sup>⑪</sup>。これらの翻訳の刊行によって、「日本文化の再発見者」としてのタウトのイメージは強固なものになりこそすれ、新たな観点から見る動きは生じない。これは、ドイツ本国においてもこの時期タウトがほとんど忘れられ、研究が進まなかったことも一因であろう。

この点と関連して指摘しておくべきは、タウト亡命後トルコで客死するまでに書かれた原稿の草稿などが、タウトの同行者エリカ・ヴィッティヒを通じて、タウトの著作の多くを翻訳している篠田秀雄の手に預けられたことである。これらの資料は、一九八一年にその篠田から岩波書店に託され、さらにタウトゆかりの高

崎にあった創造学園大学が管理することになったが、現在は再び岩波書店が管理することになった<sup>⑫</sup>。篠田によって新たに『建築芸術論』や『日記』の翻訳や既存の訳の改訳が試みられ、他にも鴨長明『方丈記』のタウトによるドイツ語訳が公表されるなど、これらの貴重な資料の情報の一部は利用されてきたが、資料が整理されて利用の便が図られるようになったのは実は最近のことである。この点についてはまた後ほどふれる。タウトの残した資料からより陰影に富んだタウト像が描き出せる可能性があったが、それは十分に生かされないまま年月が過ぎたものといえる。

戦後しばらくはタウトの日本滞在中に形成されたイメージに修正が加えられることはなかった。これの背景としては、敗戦という状況のもと外国人によって日本文化を高く評価するような観点はそれ相応に大事にしたいという日本人の認識があったのである。こうした状況は、ドイツ本国同様、一九七〇年代に変わる。新しい動向について章を改めてみていきたい。

① 管見の限りでは、今井兼次「建築家ブルーノ・タウト」『建築世界』一七―五三、一九二三年五月（『今井兼次著作集 二（作家論）私』の建築遍歴）中央公論美術出版、一九九三年に再録）がタウトを紹介したもっとも早い例である。

② 日本インターナショナル建築会については、「日本インターナショナル建築会における伊藤正文の活動と建築理念について」『日本建築

学会計画系論文集』五六六、二〇〇三年など、笠原一人の一連の研究がある。

- ③ 蔵田周忠『欧州都市の近代相』六文館、一九三二年。
- ④ 同著『ブルーノ・タウト』相模書房、一九四二年。
- ⑤ 坂口安吾『日本文化私観』同著『墮落論・日本文化私観』岩波文庫、二〇〇八年。
- ⑥ 『日本 タウトの日記』一九七五年、第三卷、一五四頁。原文は「Niigata ist so ziemlich das Schlimmste in Japan」であら。Bruno Taut in Japan. Das Tagebuch. 3. Bd. S.86
- ⑦ 西川長夫「二つの日本文化私観——ブルーノ・タウトと坂口安吾」『増補 国境の越え方——国民国家論序説』平凡社、二〇〇一年（初版は筑摩書房、一九九二年）。
- ⑧ 鈴木道次「タウト提言についてのメモ」『デザイン』三一、一九六二年、井上房一郎「久米さんとブルーノ・タウト」『久米権九郎 追憶誌』久米建築事務所、一九六六年、三原徳言「タウトと洗心邸」『新建築』五三一七、一九七八年、竹内芳太郎「タウト回想」同著『年輪の記——ある建築家の自画像』相模書房、一九七八年など。
- ⑨ 山本健吉「日本美の発見者」同著『キリシタン事始』芸術社、一九五六年など。
- ⑩ 一九五〇年から五九年に五巻本で刊行され、一九七五年に三巻に編集しなおされている（二巻に一九三三年、二巻に一九三四年、第三巻に一九三五年と三六年の日記が収録）。
- ⑪ ブルーノ・タウト『画帖桂離宮』（篠田英雄訳、岩波書店、一九八一年）。
- ⑫ この資料については、沢良子『ブルーノ・タウト遺品および関連資料』に関する調査研究『文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、基盤研究（B）、二〇〇八年』。

⑬ 『日本文化私観』は篠田が改めて六篇を選び原稿から翻訳し、『日本の芸術』と題して二つの「選書」におさめられた。『日本の家屋と生活』は、一九六六年に篠田によって改めて訳されたものが岩波書店から出版された。

⑭ Aufzeichnungen aus seiner Hütte von 3 Metern im Quadrat. Ho — die — Ki — von Kanno no Tschonoe. 築瀬一雄編『方丈記』外国語訳（碧沖洞叢書、第一〇輯）、一九六一年。

#### 四 日本におけるブルーノ・タウト研究の動向（二）

##### ——新しい動向

（一）一九七〇年代の新しい潮流

日本における一九七〇年代の新しい動向の集大成ともいえるべきは、雑誌『SD』（一九七八年）のタウト特集であるが、当時見られたのは次の三つの流れである。

第一に、建築家からのタウト再評価の動きであり、一九七一年に『SD』誌に三回にわたって連載された長谷川堯「非都市もしくは田園の目撃——日本をめぐるタウトとレーモンドの創造の軌跡」<sup>②</sup>が、管見の限り、そのもつとも早い例である。ドイツ本国と同様に、建築界において「ポストモダニズム」が唱えられるなか、「モダニズム」の時代に忘れられていたタウトを別の選択肢として再評価しようとしたものであろう。

第二に、ユンクハンスによるタウトの伝記やドイツ語で出版さ

れたタウトの著作を検討した土肥美夫の一連の研究があげられる。もともと近現代ドイツ美術の研究を進めていた土肥だが、そうした知見もふまえて、ドイツにおけるタウトの活動にも注意を払うなど、タウトの活動をその初期から日本滞在まで検討し、「日本文化の再発見者」にとどまらないタウトの側面を紹介している。

彼の一連の研究は、一九八六年に刊行された『タウト 芸術の旅——アルプス建築への道』に集大成されている。<sup>③</sup>

第三に、建築史家笹間一夫によるタウトの日本海側旅行（一九三五年五月一日～二九日）の再構成を指摘しておこう。<sup>④</sup>

タウトのこの旅行については、この部分の日記が既に『日本美の再発見』の中で翻訳されており、かなり早い段階から日本の読者に知られていた。<sup>⑤</sup> 岐阜を出発点として日本海側を北上し、青森を経て仙台に至る二週間にわたる旅行において、タウトは白川郷に立ち寄り、そこにある農家の機能的な美しさを称揚する。同様の評価を佐渡や秋田の農家にもあたえる。他方、新潟に「日本中で最悪」という評価を下したのもこの旅行の最中であり、城下町である鶴岡や弘前にも失望する。

こうしたタウトの旅行について、実地調査、当時を知る人からの聞き取り、現存しない建物についての模型の作成など、タウトの見た光景を極力再現することを試みている。そうした分析の中

で、日本におけるタウトの言動に新たな光をあたえる面がある。タウトが城下町を嫌った背景に、威圧的な城や城跡の構造物にナチス政権の在り方を思い出させるものがあつたことを推測している点である。<sup>⑥</sup> この推測が成り立つとすれば、日本滞在中のタウトの言動にも、外国人の建築家による「日本文化の再発見者」としての側面のみならず、ドイツでの見聞によって規定された面があつたことを示唆している。

以上の研究は、三〇年にわたる多様なタウトの活動の一部にメスを入れたものにすぎないが、視線の点や実証性の点でタウトについて従来からの「日本文化の再発見者」という側面以外の諸要素に光をあてている。従来タウト評価から脱却する手がかりをあたえた動きと評価できよう。

## （二）一九八〇年代後半以降の動向

ドイツ本国と同様、日本においてもタウト研究は、一九七〇年代から見られた傾向を進展させる形で、一九八〇年代後半からその様相を変える。ここでとりあげるべき研究上の方向性は次の五つである。その方向性のうち一つはタウトをとりまく状況についてのものであり、残りの四つはタウトに関するものである。

まず何よりもとりあげるべきは、一九八六年に刊行された井上

章一「つくられた桂離宮神話」<sup>⑦</sup>であろう。「桂離宮の再発見者」としてのタウトへの評価を、一九二〇年代の建築界の動向の検討から再評価している。既に一九二〇年代から日本の建築界でも「モダニズム」を積極的にとりいれる動きがあり、タウトはそうした動きに関わる人々から宣伝塔として利用された。桂離宮が彼らの間で「モダニズム」建築の先駆として再評価されていたからこそ、日本到着の翌日に上野伊三郎によって彼は案内されたというのである。これに加え、当時の日本におけるナシヨナリズムの高揚もあり、タウトは「日本文化の再発見者」という役割を割り当てられ、その役割を見事に果たしたという。

本書は、タウトを当時の日本の建築界や日本社会の状況に位置づけ、日本文化論の中の傑出した存在としてのタウトの脱神話化に成功したものである。本書刊行後の日本におけるタウト研究は、多かれ少なかれ本書の影響のもとに進められている。井上の著作は建築界を対象が限定されたものであるが、より広く日本社会の、タウトへの反応を洗い直す必要性を示すものである<sup>⑧</sup>。

こうした同時代的コンテクストのみならず、一九九〇年代以降、幕末・明治維新以来の日本とヨーロッパ・ドイツとの交流を洗い直そうという動きが見られ、そうした研究においてもタウトは格好の題材としてとりあげられてきている。もともと、その関連か

ら世に問われた研究では、旧来からの「日本文化の再発見者」としての側面が再確認される傾向がある<sup>⑨</sup>。

井上の著作の議論は、タウトを取り巻く環境にとどまらず、少なくとも日本に関しては、彼自身の言動を新たな観点から検討し直すことを要請するものといえよう。一九八〇年代後半から日本におけるタウト研究は、そうした方向に進みはじめている。

タウト自身に関する動向として第一にあげておくべきは、ドイツの研究者も協力したタウト展が日本で三回にわたり開催されたことであろう。一九八〇年の東ドイツのタウト展をそのまま持ってきた形の一九八四年の武蔵野美術大学をはじめとして、一九九四年にセゾン美術館と京都国立近代美術館による展覧会、そして二〇〇七年にはワタリウム美術館がタウト展を開催している。この三つのタウト展とも日本におけるタウトの活動のみならず、それまでは第二次世界大戦前後に書かれた邦語のタウト伝か、「日本美の再発見」などで断片的にふれられているにすぎない、ドイツにおけるタウトの活動も積極的に紹介されている。その結果、修業時代から晩年のトルコでの活動までタウトの活動が満遍なく紹介されることになった。それぞれの図録も充実しており、展覧会に脚を運ばなかった者も展示物に関する情報を共有することができる。とくに、一九九四年の展覧会は充実したものであり、そ

の図録はタウトの活動全体のかなり精度の高い目録となっている。<sup>⑪</sup>

日本における活動についても、タウトが日本到着後すぐに大阪電軌鉄道会社に依頼されながら、実現しなかった生駒山上住宅地の図面が一九九四年の展覧会で紹介されている。この図面は二〇〇七年の展覧会でも展示された。この二つの展覧会で建設当時は顧みられなかった熱海の日向邸の地下室も紹介されているが、これについてはまた後ほどふれる。

第二に、邦語による久しぶりの本格的評伝として高橋英夫『ブルーノ・タウト』が新潮社から一九九一年に刊行された。<sup>⑫</sup> 文芸評論家である高橋は、当時世に問われはじめたドイツ本国のタウト研究に依拠しつつも、「いかもの」と篠田が訳しているキツチュキschの語源を探るなど、タウト理解の根源に関わる様々な論点をとりあげている。

高橋の著作であつかわれているテーマのうち、タウト研究のためにもっとも重要なものは、『日本の家屋と生活』最終章のタイトル「日本の原語に関する考察であろう。この章は、『日本美の再発見』にも収録され、そのタイトルは篠田英雄により「永遠なるもの」と訳をつけられた。この文章では桂離宮があつかわれている。高橋は、この語の原語が、「永遠」を示す *Ewigkeit* や *ewig* とごつたドイツ語ではなく、*Das Bleibende* であることを指摘している。<sup>⑬</sup>

これは「とどまる」という意味の動詞 *bleiben* の名詞形であり、広く「残っていくもの」くらいの意味である。これに「永遠なるもの」という訳語をつけるのは、言葉のもつニュアンスの範囲内であろうが、訳者の解釈・主張が入り込んでいる可能性は否定できない。高橋は、この訳語に基づくタウト理解に問題がある可能性を指摘する。

こうした「いとも誤られやすい名訳」をふまえると、タウトの著作の多くを翻訳している篠田英雄の訳文が、タウト理解に偏向をあたえている可能性を十分認識する必要がある。彼の翻訳がこの種の問題をはらんでいるものであることはすでに指摘されている。<sup>⑭</sup> 原資料にあたって日本文化に関するタウトの著作を再検討する必要が あることを高橋の著作は示唆している。<sup>⑮</sup> 篠田訳タウトが日本文化論の中で果たした役割は認めつつ、従来の翻訳は使われない研究姿勢が必要である。

この点と関連して、第三に、日本に残っている資料を中心に、日本におけるタウトの活動を実証的に解明する研究が世に問われているのは特筆に値する。その中でも重要なものは、仙台国立工芸所在任中にタウトがおこなった様々な提案や意見書を分析した建築史家庄子晃子の一連の研究であろう。一九八五年頃から『デザイン学研究』を中心に断続的に連載され、中核部分については博

十論文（千葉大学）にまとめられた。<sup>18</sup> 一次資料の文字起こしや翻訳に限定した基礎研究であるが、日本語に訳された著作・論文からうかがいしれないタウトの側面が明らかにされた。

庄子の研究にとどまらず、日本のタウトに関する実証研究の対象はこの頃から拡大している。たとえば、日向邸の地下室の再評価・再検討が進められた。これは、タウトの離日直前に完成したものであったが、地下室の改装という制約の多い条件のもとでおこなわれた仕事であった。完成当時は日本建築・文化に対するタウト流の理解が前面に出た設計に、「モダニスト」タウトを期待する人々から失望の声が出た。近年ではこのタウト流日本建築解釈が、ポストモダンの建築のあり方に一つの手掛かりをあたえるものと再評価されるようになっていく。<sup>19</sup> タウトの日本における活動の中心の一つとなった工芸指導に関しても、仙台と高崎それぞれの博物館が調査を行っている。仙台についてはタウト設計の照明器具についての報告書が、高崎についてはタウト関連の工芸品のリストと展覧会の図録が公刊されている。<sup>20</sup> 二〇一五年には、LIXILによるタウトの工芸展が開催され、図録も出版されている。<sup>21</sup>

ドイツ時代のタウトに関しても、第一次世界大戦直後のユートピア的著作の一つ『都市の冠』の新訳や、一九二〇年代半ばの

『新しい住居』『二住居』の翻訳が出版されるなど、従来よりも具体的な情報に接近しやすくなってきた。<sup>24</sup> 翻訳についてとくに注目すべきは、『建築芸術論』の、最初のヴァージョンであるトルコ語版の底本となったドイツ語原稿からの翻訳が、『タウト建築芸術論講義』と題して出版されたことであろう。<sup>25</sup> 具体的な情報に接するという点では、田中辰明の一連の研究のように、実際にタウト設計の建物に赴いて研究を進める傾向が着実に定着している。<sup>26</sup>

最後に、こうした実証的研究を今後支えていくと思われるのは、沢良子を中心とする日本に残されたタウト関連資料の整理、そして資料目録の刊行であろう。<sup>27</sup> 目録は科学研究費の報告書の形で刊行されたものであり、一般には入手は困難であるが、今後の日本におけるタウト研究の土台の一つになる業績である。たとえば、沢が資料を整理する過程で発掘したタウトが撮影した写真を集めた酒井道夫との共著『タウトが撮ったニッポン』は、彼の著作でふられた日本人の生活の実際の光景が具体的に把握できるようになっている。<sup>28</sup>

以上五つの動向により、日本において書かれたタウトの文章の翻訳に基づいて「日本文化の再発見」をした人物とする評価から脱却し、ドイツ語の資料をもふまえ、その活動の初期から晩年に至るタウトの活動の全体像やその歴史的背景を見直す手掛かりが

あたえられたといえる。とりわけ、岩波書店に残された資料は、ドイツ本国でのタウトの活動が一次資料に基づいた再検討が一段落した中、まだ検討の余地が残されている領域であり、研究が進むにつれタウトの新たな側面が描き出されるのは十分期待できる。タウトは日本でほとんど建築をおこなっていないので、この資料から描き出すべきは、『建築芸術論』にむかう彼の建築思想の深まりである。タウトの建築論・都市論を、初期段階から晩年までの全体像として理解するには、日本における彼の見聞や議論をふまえる必要がある。日本に残された資料は、タウトの建築論の全体像の再構築に不可欠なものである。この点を考えると、今後のタウト研究において日本や日本語に関する知識の重要性が高まってくると思われる。

視点を変えると、ドイツにおける研究の進捗により明らかにされた情報により、亡命以前の情報もふまえた日本のタウト研究が十分可能になっている。したがって、日本に残された資料も、活動の初期から最後に至るタウトを一貫してとらえるような新たな観点から検討できる段階が来ている。他方、このようにドイツ本国において「モダニズム建築」によるジードルング建設という業績を取めた人物が、異文化の中でその仕事をどのようにとらえていたのかを分析することは、ヴァイマル期ドイツ・ヨーロッパの

住宅建設・都市計画の国際的意義をより明確にとらえる手掛かりとなりえるものである。

とはいえ、日本のタウト研究において以上にのべた方向性は着実にみられるが、現時点では十分に展開しているとはいいがたい。まず、確かに数度にわたるタウト展で日本以外での彼に関する様々な情報は日本においても広く共有されるようになったが、ドイツ本国におけるタウト研究の成果の紹介や消化が十分ではない。次に、日本に残された資料の利用も十分おこなわれていない。沢と酒井の共著の他は、アーヘン工科大学名誉教授シユバイデルによるタウトの日本に関する著作のドイツ語版の公刊がおこなわれている程度である。これらをのぞくと、近年の研究でも岩波書店の資料を参照した研究は、管見の限り、皆無である。したがって、タウトの新しい評価をもたらす手掛かりは十分あたえられているが、現在でも、「日本文化の再発見者」としての評価が、日本におけるタウトのイメージを規定しているように思われる。<sup>②③</sup>

① 『SD』一七一、一九七八年。

② 『SD』七五―七七、一九七一年。

③ 岩波書店。土肥もかかわった土肥・ポーゼナーなど『ブルーノ・タウトと現代——「アルプス建築」から「桂離宮」へ』（生松敬三、土肥美夫訳）、岩波書店、一九八一年は、ドイツと日本のタウト研究の架橋の試みの早い事例である。



- ④ 笹間の研究は『建築界』『東北工業大学紀要』などに公表されたが、『今昔「飛騨から裏日本へ」タウトの見たもの』井上書院、一九七九年にまとめられている。本書は、タウト研究としての側面のみならず、一九八〇年代以降、郊外型大型店舗の進出で地域ごとの独自性が失われる以前の日本海側の状況を描いている点でも貴重な文献である。
- ⑤ タウト前掲『日本美の再発見』四七一―一六頁。
- ⑥ 笹間前掲書、一二三頁。
- ⑦ 井上章一『つくられた桂離宮神話』弘文堂、一九八六年（講談社学術文庫で一九九七年再刊）。
- ⑧ その点に関連して、第二次世界大戦に向けてナシヨナリズムの高揚にタウトの著作が果たした、という従来の議論に対して、当時の雑誌などを検討してタウトの著作をそのようにあつかう記事がないことを指摘した東久仁政「ブルーノ・タウトの伊勢神宮評価とナシヨナリズム」『芸術学研究』五、一九九一年がある。桂離宮の再検討として、宮元健次『桂離宮―ブルーノ・タウトは証言する』鹿島出版会、一九九五年がある。
- ⑨ 懐徳堂記念会編『異邦人の見た近代日本』和泉書院、一九九九年、山本一貴、足立裕司、重村力編『Dreams of the other - 彼岸の夢― 研究論文集 日独百年の建築・都市計画における相互交流 桂、パウハウス、ブルーノ・タウトから新しいエコロジーへ』神戸大学二一世紀COEプログラム「安全と共生のための都市空間デザイン戦略」、二〇〇八年、島谷謙「日本を愛したドイツ人―ケンペルからタウトへ」広島大学出版会、二〇一二年、日独交流史編集委員会編『日独交流一五〇年の軌跡』雄松堂書店、二〇一三年。
- ⑩ 蔵田前掲書のほか、浦野芳雄『ブルーノ・タウトの回想』長崎書店、一九四〇年および藤島玄治郎『ブルーノ・タウト』彰国社、一九五三年。
- ⑪ 一九八四年の武蔵野美術大学のタウト展の図録は、前掲『建築家ブルーノ・タウトのすべて』、一九九四年の図録は前掲『ブルーノ・タウト 1880-1938 Nature and fantasy』（ドイツ語版 Bruno Taut - Natur und Phantasie, Ernst, Wilhelm & Sohn 1996年、一九九五年五月一日から七月三〇日までマクデブルクで開催されたタウト展のため出版された）、二〇〇七年のワタリウム美術館の図録は『ブルーノ・タウト 桂離宮とユートピア建築』オクタブ、二〇〇七年。『シンポジウム「タウト再考」』武蔵野美術大学、一九八六年は、一九八四年展のシンポジウムの成果である。
- ⑫ 高橋英夫『ブルーノ・タウト』新潮社、一九九一年。もとは、『新潮』八八七、一九九一年に掲載された。のち、講談社学術文庫（一九九五年）ちくま学芸文庫（二〇〇五年）としても再刊。本稿では講談社学術文庫版を参照した。
- ⑬ 同書一七―二三頁。
- ⑭ 同書三四―三六頁。一九三七年に出版されたMrs. Balkによる英訳版『Houses and People of Japan』の文章のタイトルは「The Permanent」と訳されている。Ibid., p. 271. 篠田はタウトが英語版の訳を気に入っていないことを指摘しており、彼の翻訳が英語版からおこなわれた可能性は低いが、篠田の「永遠なるもの」という訳語は、この英訳に影響された可能性はある。
- ⑮ この原語について最初に指摘したのは、管見の限りでは、岩波書店の資料も調査した土肥である（土肥前掲書、二四五頁）。
- ⑯ 高崎時代のタウトと密に接していた水原徳言も『画帖桂離宮』の訳に疑念をのべている。水原徳言「ブルーノ・タウトの見た桂離宮― 樞の木と画帖桂」前掲『ブルーノ・タウト 1880-1938 Nature and fantasy』。最近では、太田隆士「ブルーノ・タウトとジャポニスム」『駿河台大学論集』四九、二〇一四年。

- ①7 この点については、沢良子「ブルーノ・タウト『もう一つのニッポン』をめぐる』『日本近代文学』七二、二〇〇四年を参照。
- ①8 『商工省工芸指導所顧問としてのブルーノ・タウトの産業工芸のための規範原型論とその実践に関する指導についての研究』千葉大学、一九九九年。
- ①9 他に、広島大学の杉本研究室で進められているタウトの表現主義的著作の分析が注目に値する。代表的なものとして、赤木良子の博士論文「ブルーノ・タウトのユートピア的建築スケッチのデザイン方法に関する研究」（広島大学）、二〇一二年をあげておく。
- ②0 一九九四年と二〇〇七年のタウト展の図録のほか、「日向別邸——ブルーノ・タウト」『JA』二九、一九九八年、沢良子「ブルーノ・タウトの熱海旧日向別邸——建築手法及び理念からみた位置づけ」『武蔵野美術大学研究紀要』二八、一九九七年など。近年では、一般読者に向けても積極的に紹介されている。藤森照信「旧日向別邸／ブルーノ・タウト」（藤森照信の「日本のモダン建築 二〇世紀の名作住宅」File 2）『Modern Living』一二七、二〇一六年。生駒山上住宅地についても、堀田典裕『山形都市——黒谷了太郎の思想とその展開』彰国社、二〇一二年が、戦前の山間に住宅地をもうける試みの中でとりあげている。
- ②1 『仙台市博物館調査研究報告』五 特集／ブルーノ・タウト指導の照明器具、一九八四年。
- ②2 『ブルーノ・タウトの工芸と絵画』群馬県立歴史博物館、一九八九年、『群馬県立歴史博物館所蔵資料目録』一九八六年、一〇八一—九頁。
- ②3 『ブルーノ・タウトの工芸——ニッポンに遺したデザイン』『The craft works of Bruno Taut: Taut's design legacy in Japan』庄子晃子監修、LIXIL出版、二〇一三年。

②4 『都市の冠』（杉本俊多訳）、中央公論美術出版、二〇一一年、『新しい住居——つくり手としての女性』（斉藤理訳）、中央公論美術出版、二〇〇四年、『一住宅』（斉藤理訳）、中央公論美術出版、二〇〇四年。既存の篠田訳の復刻だが、二〇〇八年に『日本の家屋と生活』と『ニッポン』が春秋社から、『日本雑誌』（全集）第二巻のタウトのエッセイ集）が中央公論新社から出版されている。

②5 『タウト建築論講義』沢良子監訳・落合桃子訳、鹿島出版会、二〇一五年。

②6 田中辰明、柚本玲『建築家ブルーノ・タウト——人とその時代、建築、工芸』オーム社、二〇一〇年、田中辰明「ブルーノ・タウト——日本美を再発見した建築家」中央公論新社、二〇一二年、同「ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会」東海大学出版会、二〇一四年。拙稿「史料」に住む——ブルーノ・タウト設計の『森のジードルング』——『団地再生まちづくり』四——進むサステナブルな団地・まちづくり』水曜社、二〇一五年も参照。

②7 沢前掲『ブルーノ・タウト遺品および関連資料』に関する調査研究。

②8 『タウトが撮ったニッポン』武蔵野美術大学出版部、二〇〇七年。

②9 たとえば、田中辰明『ブルーノ・タウト——日本美を再発見した建築家』の副題がこの点を示唆する。

## おわりに

本稿ではドイツ本国と日本におけるタウト研究の動向を見てきた。ドイツにおけるタウトと日本におけるタウトそれぞれの研究が、それぞれの国で別個に進んできた。近年になって、日本に関

するタウトの著作のドイツ語版が出版され、他方、ドイツにおけるタウトの活動が以前よりも日本に紹介されるようになり、二つの研究動向の架橋が試みられはじめた。これにソ連やトルコ時代のタウトに関する情報が加えられていくことであろう。

第二章でドイツ本国における研究動向をふまえて、社会的背景をふまえてタウトの建築思想や都市論の構想を分析することがタウト研究の課題の一つであることを指摘したことが重要性をもつて来る。この指摘と、「はじめに」でのべた第一の問題関心が関連して来る。第一の問題関心は、拙著で明らかにした郊外に解決を求めるような、住宅問題解決の方向性の実効性を明らかにすることであった。この点については、ホルシユテンや北村がジードルングの祭りを手掛かりに検討したように、住民は自分たちの住んでいる空間を自分たちの手で作り上げようとしていたことに注意を促したい。「はじめに」であげた当時の住宅建設を成り立たせていた要因のほかに、住民の側の意向もあつたのである。この点を今後も精緻にしていく必要があるが、そのためにはタウト以外の建築家によるジードルングにも視野を広げるとともに、建築時期、立地、居住する社会層などに留意しつつ、ベルリンに建てられた四〇近いタウトのジードルングについて可能な限り社会的分析を加えることが必要であろう。その分析は、一九世紀以

来の住宅改革構想の実効性を示すのみならず、タウトの建築活動や構想の社会的位相を浮き彫りにすることにより、当時の建築の新しい動向の歴史的意義を明確にするであろう。これに加え、ソ連、日本、トルコでは十分な建築活動は起こっていないが、タウトが直面したそれぞれの社会状況を強く意識していく必要がある。

タウト研究の今後の方向性は、日本とドイツ、さらにはソ連やトルコにおける活動を、それぞれの社会の歴史的背景やタウト研究の動向をもふまえて総括的にとらえていくものになる。ドイツを離れて、日本とトルコという異郷の地の文化に誠実に向き合い、『建築芸術論』という形で自分の思想を昇華させたタウトの全体像をよりの確に把握する必要がある。現在は様々な文化を渡り歩いた人物としてのタウトの思想史的研究が国際的に共有できる課題といえるのである。「はじめに」であげた第三の関心についても、単に日独の交流史・比較史にとどまらず、より広く異文化の交流史の素材としてタウトは格好のものである。

そうした点と関連して、二〇一〇年代になってタウトの活動を時期ごとの断片ではなく、時期をこえた変化や関連、あるいはより大きな時代の潮流の中で位置づける動きが、ドイツ以外でみられるようになったことを指摘しておきたい。たとえば、グラスハ

ウスについてニールセンが、この建物にのみ焦点を合わせてきた研究動向に対して、建物の依頼主、水晶宮以来のガラス建築の伝統、そして設計のもととなったとするオオオニバスのデザインとしての歴史の中にタウトのグラスハウスを位置づけようと試みている<sup>①</sup>。日本でも長谷川章が、ドイツの東方にみられる円形居住地と馬蹄形ジードルングを関連付ける試みをしているのはじめ、タウトのジードルングや日本文化論をドイツ社会の伝統の流れの中で位置づけようとしている<sup>②</sup>。他方、日本で博士号を取得したトルコ人研究者デュンダルが、タウトの思想の時代ごとの発展を探求する必要性を指摘している<sup>③</sup>。

ただし、こうした研究もまだ一つの解釈・仮説というべき段階にとどまっており、今後こうした関心を実証的に詰めていく必要がある。こうした点で手掛かりとなるのは、宮島久雄の研究である<sup>④</sup>。彼は、タウトが日本においてその活動の中心とせざるをえなかった工芸に関して、ドイツ時代からの彼の工芸論も丹念にたどり、日本におけるタウトの工芸活動の特質を検討している。これは工芸という側面に限定された研究であるが、実際に今後のタウ

ト研究に必要なのは、ドイツ時代から日本を経てトルコに至る彼の活動に関する、こうした地道な作業である。こうした作業の積み重ねにより、「はじめに」でのべた第二の問題関心である、第一次世界大戦を挟んだ建築界の潮流の変化が、具体的に把握されるであろう。

① David Nielsen, *Bruno Taut's design inspiration for the Glashaus*, London 2016. 英語圏では Iain Boyd Whyte, *Bruno Taut and the architecture of activism*, Cambridge 1982が、タウト研究の先駆的なものである。

② 長谷川章「ドイツ田園都市の研究（その二三）スラヴ民族主義からみたブルーノ・タウトの田園都市の本質」『東京造形大学研究報』一三、二〇一二年、同「ブルーノ・タウト『画帖桂』の美学——書画同体論とドイツ・ロマン主義の全体性の美学」『東京造形大学研究報』一四、二〇一三年、同「ブルーノ・タウト『日向別邸』と日本近代工芸——「民」の時代とドイツ神秘主義の世界観」『東京造形大学研究報』一五、二〇一四年。

③ Murat Dündar, *A study on Bruno Taut's way of thought. Taut's philosophy of architecture*, LAP Lambert Academic Publishing, 2011.

④ 宮島久雄「ブルーノ・タウトと日本の工芸」懐徳堂記念会編前掲書。

（大阪市立大学大学院文学研究科教授）